

学内広報

for communication across the UT



特集：「東大の教育の国際化に意見しよう!」プロジェクト
東京大学の国際化に関する意見と要望調査(学生向け)

2008.9.22

No. 1377

東京大学の国際化に関する意見と要望調査

— 教職員・学生一人一人の声を反映させた国際化推進長期構想の立案に向けて —

「東大の教育の国際化に意見しよう！」プロジェクト

(Ⅲ. 学生向け 調査結果ダイジェスト)



国際担当理事・副学長
浅島 誠

【回答者数】

- ・日本人学生：1285名
- ・留学生：313名
- ・外国人学生：28名
- (計)：1626名

国際連携本部国際企画部は2009年度に東京大学の「国際化推進長期構想」を策定するために、昨年度後半から東京大学の国際化に関する学内調査を実施しており、今回はその調査の集大成として、東京大学の国際化の方向性や重点施策について教職員や学生の皆さま一人一人にご意見・ご要望を伺いました。

教員・職員の意見と要望を掲載した学内広報前号に引き続きご紹介するのは、**Ⅲ. 学生を対象として実施した調査結果ダイジェスト**です。この調査には、留学生など341名の外国籍の学生を含む、**計1626名**の学生が回答を寄せてくれました。これは、**日本人学生の5%、外国籍の学生の12%強が回答**してくれたことを意味します。ご回答いただいた学生の皆さん、そして、回答を呼びかけてくれた教職員などの皆さんにこの場を借りて、篤く御礼を申し上げます。一方で、回答が1割に満たなかったこと、かつ、調査形式が任意回答であったことから、調査結果をご参照される際は、**回答に一部バイアスがかかっている可能性**があることにご留意ください。

本調査結果の詳細は、**国際連携本部ホームページをご参照**ください。また、次号には本学の外国出身の教員および研究者を対象とした調査結果を紹介いたします。これらも合わせてご参照ください。なお、調査結果は年末に「東京大学国際化白書(仮称)」としてとりまとめられ、2009年度に策定される「東京大学国際化推進長期構想」の参考に供される予定です。来年度策定する「東京大学国際化推進長期構想」では、皆さんの意見を積極的に取り入れていく所存です。その節は何卒ご協力いただきたく、どうぞよろしくお願い申し上げます。

学生の声

(全学生対象)

- I. 教育の国際化に関する意見
- II. 東京大学における多言語教育
- III. 英語力の強化
- IV. 学生交流・海外大学との教育連携
- V. その他、全般的な意見

(留学生のみ対象)

- VI. 留学生サポート体制
- VII. 日本語教育
- VIII. 英語による講義
- IX. 留学満足度

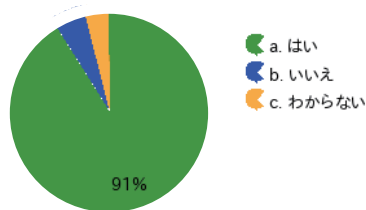
留学生は、
次号にて
特集！

教育の国際化への意見！

学生は一般的に国際的な経験や知識・スキルを得たいと思っています。

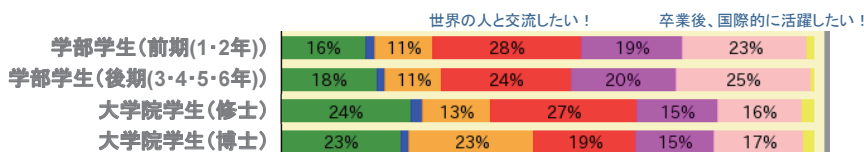
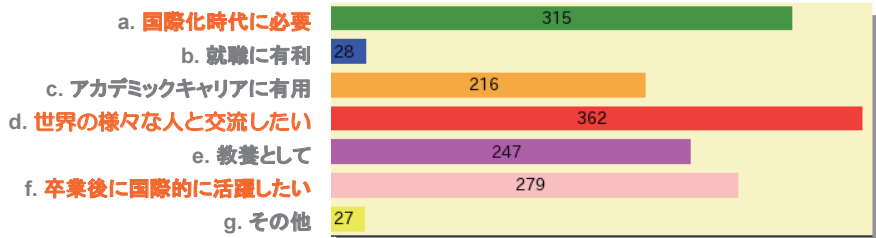
しかし、学部生の動機では「**世界の人と交流したい**」、「**卒業後に国際的に活躍したい**」が多いのに対し、博士課程に近づくにつれて、「**アカデミックキャリア**」や「**国際化時代に必要**」といった専門志向の動機に移行していきます。

●あなたは在学期間中に外国の学生と交流をしたり語学力を向上させるなど、国際的な経験や知識・スキルを得たいと思いますか？



世界の色々な人々と交流したいな！

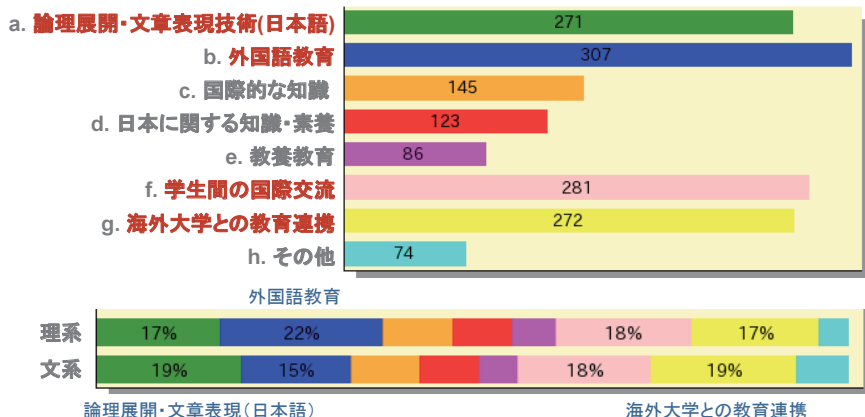
●国際的な経験や知識・スキルを得たい最大の理由は何ですか？



国際化時代に必要 アカデミックキャリアに有用

教育の国際化への意見 (続き)

●卒業後に(国内外、学術界、一般社会問わず)国際的に活躍するために、東京大学はどのような教育を特に充実させる必要があるとお考えですか？



学生は、卒業後、国際的に活躍するためには「**外国人とのコミュニケーション能力**」を鍛えることが必要と感じています(前問への回答)。

そのために、**外国語教育、国際交流、海外大学との教育連携**を求めています。また、日本語による**論理展開・文章表現技術**の必要性も認識されています。

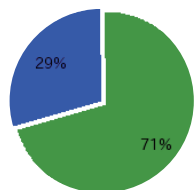
【教員の意見】



最近の学生は、日本語がなっていないんだよなあ。外国語の前に、日本語をどうにかして欲しいのだが……。

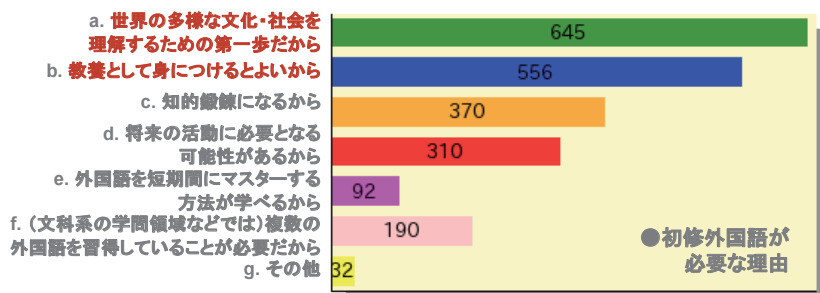


●学部1-2年で初修外国語(英語以外の第2外国語)は必修とされていますが、これらは必要だと思いますか？

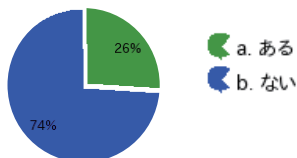


a. そう思う
b. そう思わない

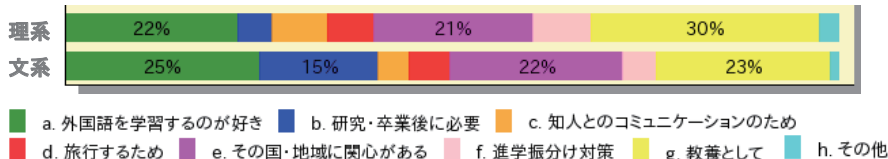
教員の74%よりやや少ないですが、第2外国語の必要性は学生にも認識されています。



●初修外国語以外の外国語(第3外国語など)を東京大学で履修したことはありますか？



★文系は、「研究・卒業後に必要」という理由が多いのが特徴的です。



多言語教育

●初修外国語に付け加えるとよい言語

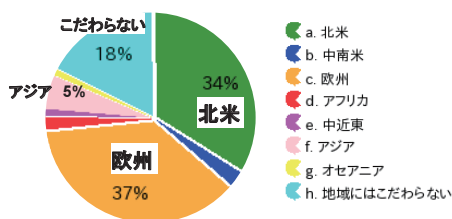
第1位	アラビア語	98
第2位	ラテン語	29
第3位	ポルトガル語	28
第4位	ヒンディー語など	22
第5位	イタリア語	12
第6位	スワヒリ語	8
"	タイ語	8
"	ベトナム語	8
第9位	ギリシャ語	7
第10位	インドネシア語	5
"	エスペラント語	5
"	オランダ語	5

第2外国語も、第3外国語も、「**教養として**」、「**外国語を学習するのが好き**」、「**その国・地域に関心がある**」などの**知的好奇心が主な学習理由**となっています。

学生交流・海外大学との教育連携 (1)

学生交流・教育連携

●特にいきたい地域



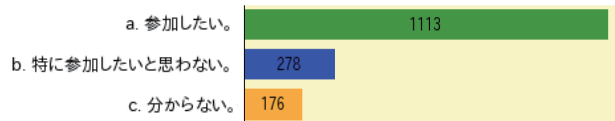
学生は交流によって、「コミュニケーション能力」を伸ばしたいと思っています。

なお、学部から修士、博士になるにつれ、「専門能力の研鑽」も交流目的のなかでより大きな比重を占めてきます。

【教員の意見】

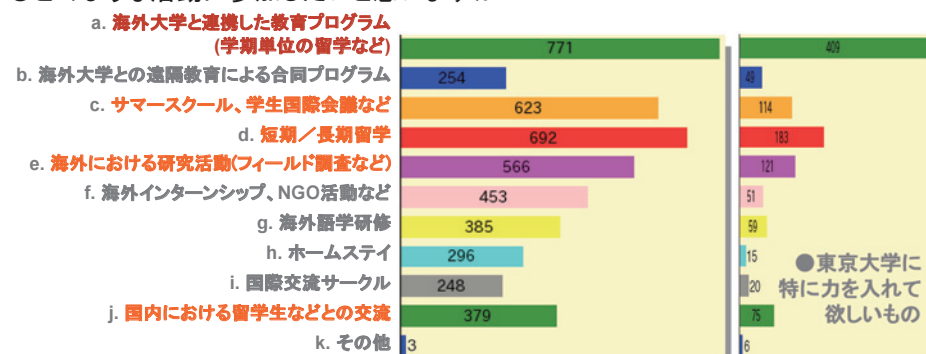
- a. 世界中での自分の位置づけ(自己評価) 171
 b. 海外における物の見方 146
 c. コミュニケーション能力 126
 d. 専門分野における研鑽 53
 e. 人とのネットワーク 52
 f. その他 19

●あなたは在学期間中に海外大学との学生交流や合同の教育プログラム、その他の国際活動などに参加したいと思いますか？

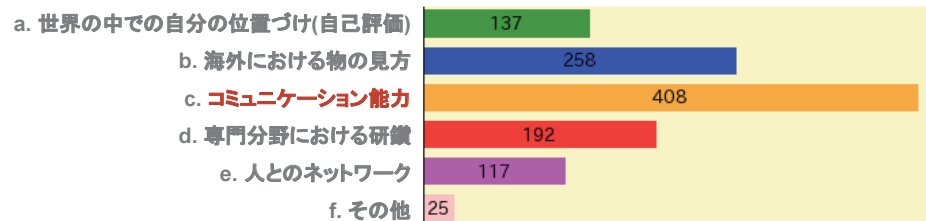


「国際化」に関心のある学生のみがアンケートに回答しているとしても、**1113名の学生が学生交流などに参加したい!**という事実には留意する必要があります。

●どのような活動に参加したいと思いますか？



●あなたはこれを通じて、何を得ることを最も期待していますか？



海外に行っても、人と話さずに帰って来てしまう学生もいるし。。。まずは、世界中での自分の立ち位置を知ることからではないかな。



【学生交流・教育連携に関するコメントから】

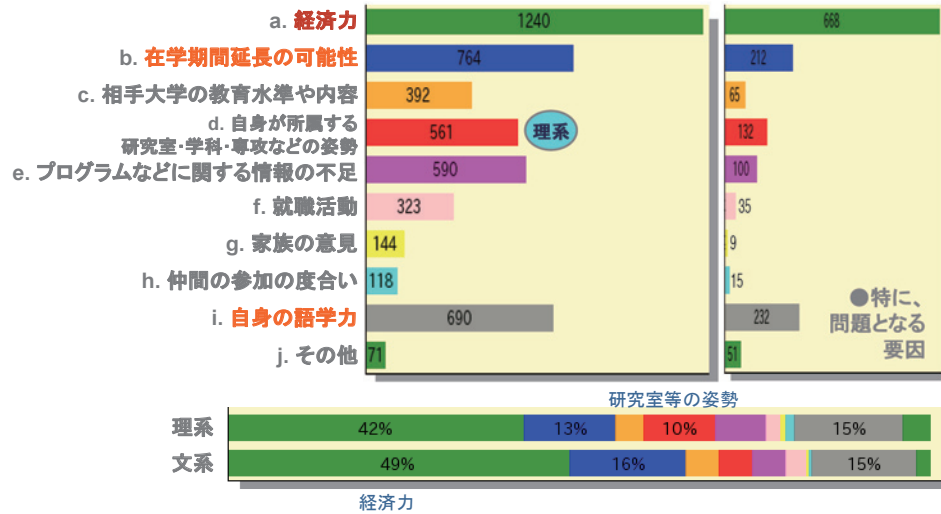
・「**留学情報と留学機会が他大学に比べて少なすぎる!**」という意見が多数ありました。学部・研究科によって状況が異なることに対する不満も多数ありました。AIKOM(教養学部の学生交流プログラム)が自身の所属する部局にも欲しいという意見も多数。また、「留学したところでどういことをするのか、**語学留学以外のイメージがつかめない。**」と、留学プログラムの内容の明示を求める声も複数ありました。

・留学やサマープログラムに関心はあるが、**経済面で断念**した、という声も多数ありました。「短期留学した友人がいるが、バイトで貯めた貯金から**約70万円**つかったと聞いた。(中略)私はそんなお金は持っていない。」との指摘も。このため、留学のための**経済的支援を要望**する声が多数見受けられました。

・時間的余裕がないため、**短期で手軽な留学プログラムを増やして欲しい**、との声が多数ある一方で、長期的でない効果がないとの指摘も。「**長期的でない、人間関係の機微や海外のもの見方などは見えてこない。日本国内の外国人学生となら、一時的な関係以上のことが持てると期待できる。**」「一人を送り出してもその一人一人しか経験できないが、一人受け入れれば(東京大学の)多数の人がそれに関わることができる。」。このため、**学内の留学生と日本人学生との間の交流の機会を希望する声**が多数ありました。同時に、**学内の留学生の出身地域・国の多様化を希望する声**も複数ありました。

学生交流・海外大学との教育連携 (2)

●学生交流などの活動に参加する場合、どのようなことが問題になりますか？参加を見送る要因を挙げてください。



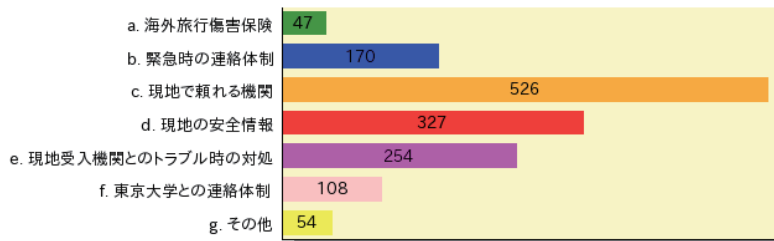
学生からのコメントにも多数指摘されていたように、学生が海外留学する場合は、「**経済力**」や「**在学期間の延長の可能性**」がネックとなります。

また、理系の学生からは「**実験・演習・研究が忙しすぎて長期間、研究室を抜けられない**」との指摘が多数ありました。研究室に、学生を派遣するインセンティブを与えて欲しいとの声も！

一方で、**自身の語学力が意外と留学を見送る原因**となっています。「留学するのは英語ができる人だけ」「語学力の優劣を、交流活動参加可否の選考基準にするのは、相応しくない。交流活動の中で、語学力は自然と向上する。」との意見も。

“**There is no need to go abroad to study a language.**” との指摘も。学生交流・派遣を行う目的を問い直す必要があるようです。

●海外で活動する場合、何が特に気になりますか？



●学生交流や海外大学との教育連携に関する、いくつかのユニークの意見から：

今のところ、学生が海外大学に留学するという形での連携が多いのだが、経済面や時期的な問題（就職活動等）で留学が困難な学生も少なくない。
 なので、**海外大学から教員を東大に招聘し、一定期間講義を行ってもらうという形式を導入していただきたい。**
 また可能であれば、**海外大学の授業を中継して、日本の学生も授業に同時参加できるような講義を行ってほしい。**

成績上位者は、留学費用無料など、にするとよいと思います。
 このことにより、**東京大学の学生の学習姿勢も一部ですが向上し、**東京大学の国際化の素地が出来ると思います。

外国語を話せるようになるために、**日本人のための外国人チューター制度**が欲しい

学生主催の国際ワークショップを大学が経済的に支援する体制作りを進めてほしい。
 現状では、教授ならば科研費等の補助を受けて日本開催の国際会議に海外の教授を招聘できるが、学生または若手研究者が海外の学生・若手研究者を招待してワークショップを開催するのは経済的に不可能である。
 しかし、若手の交流の方がむしろ、独創的な発明や発見につながる可能性が高いと感じる。

【英語教育に関するいくつかの辛辣なコメント】 ===== (次頁からの、はみだし記事) =====>>>>>

○I think that **Todai students generally have strong English language skills, but they lack important knowledge about context and connotation.** I believe that it may only be possible to learn common English usage through international interaction such as study abroad, reading foreign publications, and taking courses from foreign instructors.

○専門課程に入ってから、**教授や准教授、助教の人たちですら、ちゃんとした英語を話せない人が多いことに、たいへん驚いた。**留学生の受入数を増やそうとする中で、学生の英語力向上は言うまでもないが、スタッフ側にもちゃんとした教育を行う必要があると強く感じる。

○英語を身につけたいのならば自主的に日本にいる外国人の方と会えばいいし、ホームステイや旅行にでもいけばいいというのは正論ですが、**学生の多くはそういった大きな投資をするくらいなら他のことを勉強するし、普通に遊んでいた方がいいと考えるのが当たり前**です。なので、国際化を標榜して従来通りに講義を開いたりイベントをやっても効果はないと思います。必然的、あるいは強制的に学生と外国人の方とがコミュニケーションをとらなければならないといった体制を学生生活に組み込まない限りは、**いくら時間がたっても最高学府の生徒の多くが外国人に声をかけられれば動揺しコミュニケーションなどとれず、グローバルな視点を持つとしても日本人としてのドメスティックな視点以外に何も無い視点しか持ち得ないことになると**思います。

○とにかく、**使わざるを得ない状況に追い込めば、モチベーションの低い人も引き上げられる**と思う。

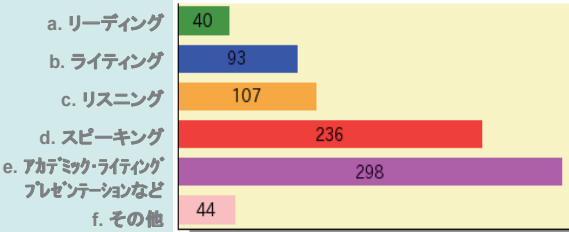
英語教育：Speaking vs. Reading

学生の英語力

スピーキングには全く自信がありません！
アカデミック・ライティングなどは、いわんやです。

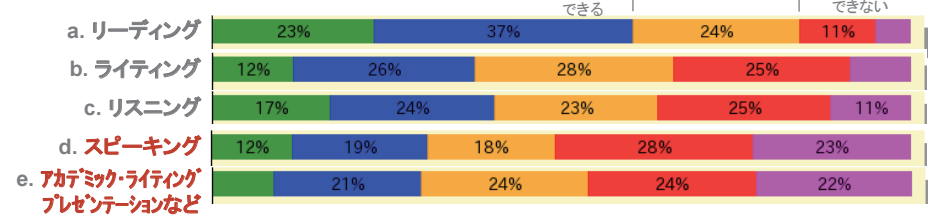


【教員の意見】

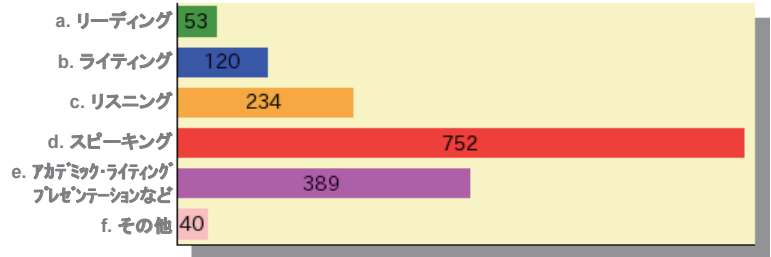


●あなたはご自身の英語力についてどう評価していますか？

1) 自信あり、2) まあまあできる、3) ふつう、4) あまりできない、5) 全く自信なし、の5段階評価で選択してください。



●どの側面を最も強化する必要性を感じますか？



話すことも確かに大事だけど、論文執筆や発表の指導で苦労しているからなあ。やはり、アカデミック・ライティングを鍛えてほしい。そもそも、大学で行う英語教育だからね。



●英語教育・徹底討論！

「英語によるインプットよりも、アウトプットの訓練を強化するべきだと思う。」

【英語教育に関するコメントから】

・東京大学の英語教育（特に、学部前期課程の必修科目である英語1列）について、多くの意見をいただきました。「読解」を中心とした大人数講義に対して、「本を読むなら家でできるし、リスニングもCDがあれば家でできる。わざわざあれだけの人を集めて、あんな一方的な授業形態で授業をすることの機会費用を考えて欲しい。90分間英語オンリーで飲み会をやったほうが、よほど英語力が身につきます。」「現在行われている英語1列は、授業がテキストの内容理解にとどまっておらず、また、テストがマークシート方式であることもあり、学力向上に全くつながってない。」「学生の英語力を向上させるところか、入学時の英語力を維持することすらできていない。」「英語によるインプットよりも、アウトプットの訓練を強化するべき。」など。

・一方で、ライティングやリスニングなどの中級英語は、抽選で落ちてしまったことを残念がる声が多数ありました。「中級英語の枠を増やしてください。とりたて授業がとれないのでは何のために大学にいるのかわかりません。」

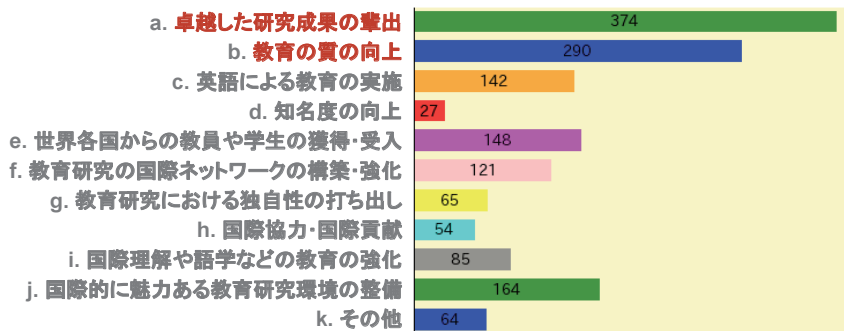
・他方で、英語力レベル別の講義に対する要望が多数ありました。「帰国子女の方々との差は歴然としており、現在本学で提供されている英語関係の授業も、英語が得意な海外経験者が多数集まり、英語が苦手な学生が受講しづらい。」「大学院から本学へ入学する外部大学出身者が多い本学では、特に大学院における英語教育の充実は不可欠だと考える。」また、進学振分けを気にする声も。「英語が苦手な人が進学振り分けを気にせず強化に励むことができるような、レベル別などのシステムを導入してほしい。」

・自身の努力だけではできない英語の実践の場に対して、大変多数の要望が寄せられました。「英語力という意味では、聞いて話すことは、常にその場でフィードバックがあるので、重要だと思います。読み書きの授業では、時とすると、授業そのものは日本語で行われ、英語は授業のネタを提供するだけになりがちなので、英語教育としてはやりっぱなしのことが多く、どこまで読めて書けているのかわからないまま、ただ量をこなす、という方法になりがちです。（もちろん先生が添削して返していただければ、読み書きもより効果的ですが）」" English, like any language, is not learned simply by having a teacher stand in front of a class and lecture about it. It is not learned by memorizing wordlists, or grammar rules. The only way to learn a Language is through use." 「他の技術と同様、外国語もそれが必要な状況に身を置かなければ習得できない。」「講義・討論が英語で行なわれ、課題執筆なども英語で行なう授業の充実が必要。」「圧倒的にコミュニケーションの授業が少なすぎる。ECCに通えといっているのか。」「実際に外国人と英語で交流できるような機会を増やしてほしい。」

・結局のところ、会話力、ディベート力等の強化という点は民間の語学教室等の利用を視野に入れ、大学で行なう英語教育は学術英語や知的に高度な文章の読解・作文などに集中するといった、英語学習の目的に応じての、大学での英語教育の役割分担を検討する必要があるのかもしれない。「英語力向上のために学外に場を求める時間がないので、ぜひとも学内に日常的に参加できるような語学教育プログラムを作ってほしい」と、学内に語学教室を求める声も複数ありました。

東京大学の国際化に関する全般的な意見

●あなたは東京大学が世界の中でさらに発展していくために、何に力を入れていくとよいと思いますか？



【「東京大学は世界の中でどのような大学となればよいか」のコメント】

東京大学が目指すべき姿については、「HarvardやOxfordとならぶ大学」「アジアの中心的大学」「とにかく、いい仕事をする事」などの端的なコメントと並んで、以下のような辛辣な意見を多数いただきました。

○より多くの留学生の獲得。そのために必要な魅力的な環境整備。(中略) 実話に基づく意見だが、三鷹国際学生宿舎を退寮した留学生の友人が、豊島国際学生宿舎に入居できず、風呂トイレなしの**家賃2万円程度の物件を探す姿を見て**、東大はもっと留学生にとって魅力のある環境を整備すべきだろうということを強く感じた。

○外国人の留学生に対し、授業料免除かつ奨学金も返還義務なしというのは、日本の学生と差をつけすぎだと思う。日本人のほとんどの学生は返還義務のある奨学金だから。一体どこの国の大学なのかわからない。

○「外部への広報も資金獲得のために必要だと思うが、内部者の環境が経費削減という方向で縮小していくと、学習環境の個人化につながり、大学が「場」として衰退する(家の方が快適となる)。

サロンのような、学生がたまるような、旧来的な「場としての大学」を、東京大学くらいは維持していかないと(むしろ東京大学くらいしか、「場としての大学」の解体に抵抗できる大学はない)、ただ講義や用事を足すために大学に行くという、それこそ(「大学」ではなく)「学校」と化していく現代的流れのなかで混迷するだけになると考えられる。その点は日々危機感を感じているし、**世界の中からみても(知的に)おもしろい大学であるためにも、守れるところは時代に抵抗して守ってほしい。**

○大学の国際化と、留学生獲得に必死になって大学の真の姿を見失うことは必ずしも同じではないことに気づいていただきたい。**大学ではなく、「日本人学生」を国際化することにもっと力を入れて欲しい。**

○"Since University of Tokyo is the best university in Japan, I think the students here should be strong in both academic and English proficiency. If the English standard among the students and lecturers are very high, this will definitely level-up the school's image internationally." **東京大学の英語による通用性を強化すべき、との意見は、留学生に多かった**です。

【本件問い合わせ先】

東京大学国際連携本部国際企画部

担当: 中川淳司・船守美穂(ext.21683)、本部国際系・三枝和輝(ext.20263)

E-mail: intl_framework@adm.u-tokyo.ac.jp

調査結果URL: http://dir.u-tokyo.ac.jp/gaiyo/gakunai_chousa/ (学内のみ)

東京大学の国際化のあり方については、コメントにも多く見られましたが、研究水準の卓越性のみならず、「**教育の質の向上**」の必要性が多数指摘されました。

特に、「**大学内の在生学生に対する教育の質を高めるように努力すべき**」「**世界に通用する博士号の学位**」といった意見が相次ぎました。



【備考】

本集計では、「理系・文系」をご回答いただいた方の所属部局を元に分類しました。

○理系＝理学系研究科；工学系研究科；農学生命科学研究科；医学系研究科；薬学系研究科；数理学系研究科；新領域創成科学研究科；情報理工学系研究科；医科学研究所；地震研究所；生産技術研究所；分子細胞生物学研究所；宇宙線研究所；物性研究所；海洋研究所；先端科学技術研究センター；全学センター；機構など

○文系＝人文社会系研究科；教育学研究科；法学政治学研究科；経済学研究科；総合文化研究科；情報学環；学際情報学府；公共政策大学院；東洋文化研究所；社会科学研究所；史料編纂所；本部；その他

※この調査はインターネットアンケート形式で行われたため、調査結果に一部バイアスがかかっている可能性がありますこと、ご留意ください。

次回は、東京大学の「留学生と外国人教員・研究者の声」を特集します。

「あなたは、東京大学以外の大学に行った方が良かったと思ったことがあるか？」
との質問には、どのような回答がされているでしょう。

次回
特集予告

NEWS

一般ニュース



本部学生支援グループ

UtoI（東京大学アウトリーチイニシアティブ）第2回研究会開催される

8月7日（木）に、130周年記念事業「学生企画コンテスト」で優秀賞企画となったUtoI（東京大学アウトリーチイニシアティブ）の第2回研究会が開催された。3月12日（水）に開催した第1回研究会と同様に本学におけるアウトリーチ活動およびその振興に関心のある13名（8部局）の教職員・学生が参加した。

第1回研究会を踏まえ、UtoIの具体的な取り組みとしてまず、本学で行われる一般向け、特に高校生に向けたアウトリーチイベントを紹介するWEBサイト（ポータルサイト）を新たに開設することになり、企画者である林洋平さん（総合文化研究科博士課程）からこのポータルサイトのコンセプトが説明され、さらに、加村啓一郎さん（理学系研究科博士課程）からMITのアウトリーチデータベースの紹介があった。

これに対し、参加者からは次のとおり発言があり、今後ポータルサイト制作に向けて参考とすることになった。

- ①アウトリーチ活動をする人材を増やすためにも、各部局のWEBサイトからリンクを貼る必要がある。
- ②アウトリーチ活動を独自に企画し実施している本学学生団体が活動紹介できるようなコンテンツを構築してほしい。
- ③高校生をターゲットとするポータルサイトとしては携帯サイトが必要である。
- ④アウトリーチイベントの活動レポートをWEBサイトに載せてほしい。
- ⑤本学公式WEBサイトとして継続的に運用し、今後の方向性が示されたポータルサイトであれば、より充実

したコンテンツとなる。

最後に、企画者である住田朋久さん（総合文化研究科修士課程）から、UtoIの取り組みとして11月22日（土）～24日（月・祝）に東京お台場で開催される「サイエンスアゴラ 2008」に、企画名「大学アウトリーチの可能性（仮）」として出展することが報告された。

<http://scienceportal.jp/scienceagora/agora2008/>



UtoI 第2回研究会

なお、アウトリーチ活動にご興味ある方は、下記WEBサイトをご覧ください。



<http://www.utoi.jp/>
東京大学
アウトリーチイニシアティブ

UtoIの取り組みについての問い合わせ先
本部学生支援グループ（内線 22513）
E-MAIL: gakuseiseikatsu@ml.adm.u-tokyo.ac.jp
担当：岡田、渡邊



本部留学生支援グループ

株式会社アサツー ディ・ケイ会長と
東京大学アサツー ディ・ケイ中国育英基金奨学生、
本学関係者の懇談会

9月1日（月）12時30分から、山上会館において「株式会社アサツー ディ・ケイ（ADK）会長と東京大学アサツー ディ・ケイ中国育英基金奨学生、本学関係者の懇談会」が開催された。

この懇談会は、「東京大学アサツー ディ・ケイ中国育英基金」による奨学生4期分（修士1～2年次、合計16名）が本年度、揃うこととなったのを機に、寄附者であるADK 稲垣正夫会長及びADK関係者をお招きし、本学ADK中国育英基金奨学生、小宮山宏総長、浅島誠

理事・副学長等本学関係者と懇談を行う目的で、はじめて開催されたものである。

懇談会は、総長からの「皆さんは ADK 奨学生として『嚆矢』である。最初が肝心なので、しっかりがんばってほしい。」との挨拶にはじまり、出席した 11 名の奨学生による自己紹介があり、その後、稲垣会長から奨学生に対して、奨学金の趣旨等について講話をいただいた。稲垣会長からは、奨学生に対して、「東大での経験を生かし、中国のみならず、世界に羽ばたいていただきたい。」と中国語を交えて激励の言葉を贈られた。

その後、本年 9 月に新領域創成科学研究科修士課程を修了する谷云鵬さん、樊向軍さん 2 名に対して、稲垣会長から記念品の授与が行われ、記念品を授与された 2 名の奨学生からは、今までの ADK からの多大なご支援に対してお礼の言葉があった。

その後、ランチを取りながら、終始和やかな雰囲気の中で、奨学生は、稲垣会長をはじめ ADK 関係者、総長等本学関係者と懇談を行った。

予定時間の 13 時 50 分に、浅島理事・副学長から閉会の挨拶があり、その後山上会館地階ホールにおいて、参加者一同による記念撮影を行い、懇談会は盛会のうちに終了した。



奨学生への講話を行う ADK 稲垣正夫会長



懇談会の後、一同揃っての記念撮影

本部環境安全グループ
「本部棟等避難訓練」、実施される
一般

9 月 3 日（水）、地震発生に伴い本部棟内に火災が発生したとの想定で避難訓練及び体験訓練がおこなわれた。これは本部棟教職員を対象に本郷消防署及び文京区の協力を得て環境安全本部が計画し、実施したものである。

13 時 30 分、模擬緊急地震速報と一齐警告音から始まり、本部棟前広場に各系ごとに避難・集合し、点呼を取り、避難完了の確認をした。その後続けて、はしご車訓練や消火器訓練、起震車体験や煙体験ハウス等の「防災体験訓練」も実施した。

当日は、小宮山宏総長をはじめ、岡村定矩環境安全担当理事、中西友子環境安全本部長ほか総勢約 350 名が参加し、実際に大きな地震が起きた時の対応を確認する機会となった。

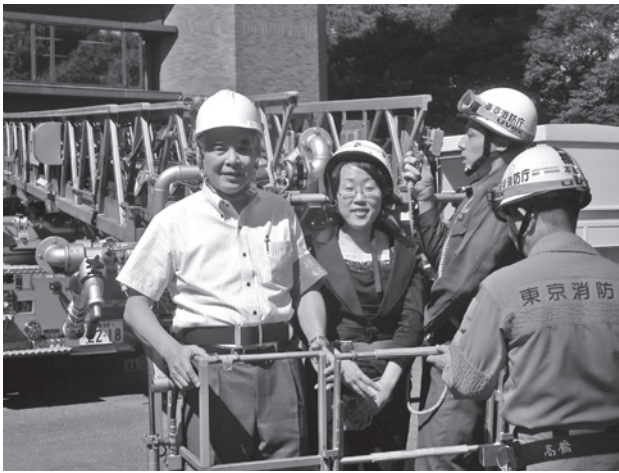
最後に岡村理事より「本日の体験をときどきイメージして実際に大きな地震が起きた時に、役立てていただきたい」との講評があり、約 1 時間の訓練が無事終了した。



本部棟前広場で整列の様子



起震車体験をされた小宮山総長

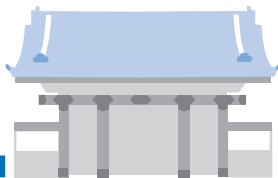


はしご車体験をする岡村理事



岡村理事による講評の様子

部局 ニュース



大学院薬学系研究科・薬学部

外国人留学生・外国人研究員との交流会が開催される

7月23日(水)18時から、薬学部図書館1階ラウンジにおいて、薬学系研究科・薬学部主催の外国人留学生・研究員との交流会が開催された。

この催しは、留学生・研究員と教職員などが相互の理解を深めることを目的として、毎年7月中旬に開催されている。

当日は留学生、外国人研究員、日本人大学院生チューター、有志の学部学生、教職員など、総勢60名が出席した。

一條国際交流委員会委員長から「留学生や研究員の今後の活躍を期待する」との挨拶と乾杯に続き、すぐに留学生や日本人学生の手作りの料理が紹介された。順不同

で列挙すると、ネパールの野菜料理、デンマークのミートボール(コケモモジャム付き)、中国の水餃子、抹茶ロールケーキである。とりわけ毎年恒例の留学生有志による手作りの水餃子は、準備のために留学生たちが午後一杯を費やすだけあって、皆でたくさん水餃子を堪能することができた。

和やかな懇談のあと、新たな留学生と研究員の自己紹介が行われ、日本人学生による応援団のエールを皮切りにアトラクションが始まった。学部学生の絶妙な手品の技に感嘆の声が上がり、軽快なマジックがなごやかな笑いを生んだ。一転して、ボクシングの鋭いパンチに驚きの声が上がると、つづいて、ジャズダンスが披露されると手拍子でさらに会場が沸いた。つづく少林寺拳法の豪快な技には大歓声が上がった。アトラクションの終了は恒例のブルガリアのダンスを皆で踊り、熱い汗を流した。

最後に、折原准教授の温かいご挨拶があり、教務チーム主査の一本締めが続き、予定の2時間はあっという間に過ぎてしまい、盛況のうちに閉会となった。

日頃は研究活動に忙しい留学生や研究員だが、教職員や学生との親睦を深める良い機会となり、楽しい夏の一晩となった。



ジャグリング、息もぴったり



「かっこいい」の声が飛んだジャズダンス

医学部附属病院

「2009 看護フォーラム」で看護師募集活動を実施

医学部附属病院では、今年も昨年に引き続き、7月27日（日）に東京ビッグサイトにて開催されたナース専科看護フォーラム事務局主催の「2009 看護フォーラム（合同就職説明会）」に参加した。

昨年の看護フォーラムでは、たくさんの看護学生が当院のブースを訪れ、4ブースでも対応しきれない程の盛況ぶりとなり、年々高まる当院への看護学生の関心を肌で感じる事ができた。今年も昨年と同様の訪問を見込んで4ブースを確保して臨んだ。当日の会場内は、各医療機関の説明を熱心に聞く学生達の熱気に満ちていた。当院のブースにも大勢の学生が集まり、熱心に当院の説明に耳を傾けていた。

学生への対応は、榮木看護部長を筆頭に、中島看護職員採用推進本部長（救急部医師）、看護職員及び事務職員が行ない、訪れた学生一人一人に対し当院の魅力について丁寧に説明していた。それに対して多くの学生から積極的に質問が寄せられた。今年は、昨年度に続き「先輩ナースと語ろう」コーナーを設けた。学生からは「自分たちと年齢の近い若手現役看護師から生の声を聞くことができ、貴重な体験である」と、昨年にもまして好評だった。今年も昨年と同様に学生達の当院への関心の高さが窺え、看護学生の当院に対する認知度が高まっている事を実感した次第である。

また、7月13日（日）には、新宿NSビルで開催された「大学病院限定 合同就職説明会」（主催：㈱スーパーナース）に参加し、東大病院ブースを開設した。この説明会は大学病院のみが参加する合同説明会で、大学病院への就職を念頭においた看護学生を対象としている。昨年は大勢の学生が当院ブースを訪問したが、今年も大勢の学生が訪れ、ブースから学生が溢れてしまう程の盛況ぶりだった。主催者の集計によると、参加した大学病院の中で看護学生が一番訪問したブースは当院とのことである。両日を合わせ、合計200名以上の看護学生が当院のブースを訪れてくれた。

昨今の看護学生の就職事情については、年々全国的に看護職員の確保に対する動きが早まっており、各医療機関も昨年以上に看護職員の確保には力を入れている。そのため、当院も9月の採用試験まで気を抜かず、今後も積極的な採用活動を行なっていきたいと考えている。



若手先輩ナースの話を熱心に聴く学生達



大勢の学生で賑わう東大病院ブース（説明は、榮木看護部長）

生産技術研究所

革新的シミュレーション研究センター設立記念シンポジウムを開催

革新的シミュレーション研究センターの設立記念シンポジウムを、7月29日（火）に、当研究所のコンベンションホールにて開催した。当日は猛暑にもかかわらず、ホールの定員をはるかにオーバーする約340名の参加者があり、用意した第二会場も満員となった。前田正史所長による主催者挨拶などに続いて、まず本学の西尾茂文理事・副学長による、シミュレーションの未来像に関する基調講演を通じた激励を受けたあと、加藤千幸センター長より、これまでの実績と今後の具体的役割・目標についての紹介が行われた。特に、「本センターは先端的なシミュレーション技術の研究開発のみならず、それをベースに社会の様々な課題の解決を図るところまで踏み込んだ取り組みを行う」という意気込みが語られたことに対して、参加者より大いなる称賛と期待が寄せられた。招待講演は、文部科学省の倉持隆雄大臣官房審議官より、次世代スーパーコンピュータプロジェクトの紹介とそれから初めて本センターで研究開発するシミュレーション技術への期待が述べられ、次いで産業界を代表する形で、㈱日立プラントテクノロジーの上田新次郎執行役専務研究開

発本部長より、産業応用面でのシミュレーション技術の動向・予測に関する具体例を混じえた紹介と本センターに対する、中核研究開発機関としての期待が熱く語られた。最後に、我が国のシミュレーション技術の草分けの一人である（独）宇宙航空研究開発機構の藤井孝藏教授より、21世紀の計算科学シミュレーションの新しい展開という格調の高い内容について、参加者の興味を引くわかりやすい解説が行われ、第二会場の参加者を含めた満席の会場からの拍手喝采のうちに講演会が終了した。



西尾茂文理事・副学長の基調講演



センターの取り組みを熱く語る加藤千幸センター長



文科省大臣官房審議官倉持隆雄氏の招待講演

講演会終了後に引き続いて開催された設立記念パーティーでも220名を超える参加者で会場が溢れかえり、フランクな意見交換に花が咲いた。ローカルに行われた遅い時間までの熱心な議論も含め、新センターへの期待をひしひしと感ずるひとときとなった。

地震研究所
第17回一般公開・公開講義「大地に刻まれた歴史」を開催

7月30日（水）、地震研究所は、恒例の一般公開・公開講義を開催した。5月の中国四川地震、6月の岩手・宮城内陸地震、7月の岩手県中部の地震など最近相次いだ地震への関心からか、研究所公開には810名、安田講堂での公開講義には720名もの老若男女が来場された。

今年のテーマは「大地に刻まれた歴史」。地震や火山の理解には、最新の観測データだけでなく、地震が作った地形や火山の噴出物など、大地に残された過去の記録が欠かせない。公開講義では、火山と地震の両分野から、歴史的データに基づく最新の研究が紹介された。

日本火山学会会長でもある藤井敏嗣教授は、「歴史を封じ込めた火山噴火」と題し、紀元1世紀の噴火でポンペイを埋めたイタリアのヴェスビオ火山について講演。日本チームによる調査でローマ繁栄期のディオニソス像が発掘されたソンマ・ヴェスビアーナ遺跡は、実は5世紀の噴火で埋まったものだという意外な事実や、日本でも7300年前に縄文文化を滅ぼした巨大噴火が九州で発生しており、同様な噴火がいつ起こっても不思議ではないという怖い事実が紹介された。

新進気鋭の佐竹健治教授は、「発掘された巨大地震と津波の痕跡」と題し、古文書や地層に残された地震・津波の痕跡をたどる調査について解説。「日本書紀」などからわかった南海地震をはじめとする日本の巨大地震の系譜や、20世紀最大といわれる1960年チリ地震（M9.5）の津波堆積物からわかった超巨大地震の繰り返し周期（300年）などが紹介された。これらは将来の大地震の予測に不可欠なデータである。

今年一般公開では、2号館地下の地震計博物館も復活し、1898年から本学で100年近く地震観測を続けた大森式長周期地震計も披露された。地下2階の耐震工学実験室で行われた1/2スケールの鉄筋コンクリート製柱の破壊実験も圧巻だった。また院生による学生実験では、コイルを巻いて電磁式の地震計を作る「手作り地震計」や、ゴマと塩から堆積層を作る「テーブルで地球科学」という体験コーナーが若者の人気を集めていた。

15分のミニ講演と質疑で最先端の研究を紹介する「なまぜカフェ」も盛況。6人の研究者が「四川地震と岩手・宮城内陸地震」、「IT強震計の開発と挑戦」などについて語り、参加者はお茶を片手に交流を楽しんだ。

一般公開の翌日は、高校生向けの東京大学オープンキャンパスがあり、地震研でも200名以上の高校生を受

け入れた。今年も2日間で1,000名以上の方が地震研を訪れたことになる。



テーブルで地球科学。小麦粉とココアで断層作り



鉄筋コンクリート柱の破壊実験も公開



家の揺れをIT強震計で捉え耐震診断

医科学研究所 医科学研究所公開セミナー「ラボ 部局」を開催

今年で4回目となる医科学研究所公開セミナー「ラボラボ」を8月5日（火）に開催した。本セミナーは、文部科学省科学技術振興調整費重要課題解決型研究「新興・再興感染症制圧のための共同戦略」（代表：山本雅・医科学研究所教授）のアウトリーチ活動で、研究者が感染症制圧を目指してどのような研究をしているのかを、主に高校生、大学生を対象にわかりやすく紹介している。

「ヘルペスって？ -脳炎から性感染症まで様々な病態を引き起こすウイルスの正体とそのガン治療への利用」の講演では、川口寧准教授から、ヘルペスウイルスの多様性などについて説明があった。また、ウイルスの特徴を利用したガンの治療法について話が進むと、会場から質問も飛び出し大いに盛り上がった。参加者は約150名のほり、盛会のうちに幕を閉じた。アンケートでは、「大変面白かった。」「目からうろこが落ちました。」「感動しました。研究をがんばってください。」「セミナーの継続開催を望む声も数多く寄せられた。

またセミナーと連動して、8月7日（木）に、医科学研究所の感染症・免疫関連の10研究室の協力のもと、研究室見学会も開催した。実際に細胞を顕微鏡で観察したり、最新の研究設備を見学したり、研究者と気さくに意見交換をしたりと、充実した内容となった。参加者33名からは、「研究者に親近感が持てた。」などの意見が寄せられた。



開会挨拶を行う山本教授（課題代表者）



講演を行う川口准教授

大学総合教育研究センター

日中高等教育財政ワークショップ「新しい時代の高等教育財政一日中共同の課題」の報告

大学総合教育研究センターは、8月6日（水）に、中国の高等教育研究者5名をお招きして、日中高等教育財政ワークショップを開催した。

日本と中国の高等教育は、発展段階は異なるものの、教育費の高騰、大学評価と資源配分、市場化志向の教育改革など多くの共通の動向と課題を抱えている。とりわけ高等教育財政に関しては、公財政支出の減少のもとでの外部資金など資金の多元化を求められている。他方、大きな収入源である授業料が高騰し、教育機会の格差が拡大することが懸念されており、この是正のための奨学金政策が重要な課題となっている。このように日中両国には、とりわけ高等教育財政について、共通の課題が多く見られる。



山上会館でのワークショップの様子

大学総合教育研究センターは、これまで内外の高等教育研究者や教育関係者と積極的な交流を行ってきた。今回は中国から、高等教育財政に関する第一線の研究者をお招きして、日本側高等教育財政研究者とともに、ワークショップを開催した。ワークショップにおいて日中両国の高等教育財政研究者は、両国高等教育の研究課題と政策動向、大学財政の現状、財務基盤の強化、学費・奨

学金問題など日本と中国の共通の財政課題について活発な議論を行った。このワークショップから、中国のみならず日本の高等教育改革にとっても、有益なインプリケーションが得られた。

中国側の発表者は、発表順に韓民（中国国家教育発展研究センター研究員）、鄔大光（アモイ大学副学長・教授）、陳武元（アモイ大学高等教育研究所準教授）、劉国永（上海財經大学教育財政評価センター準研究員）、徐国興（華東師範大学高等教育研究所・講師）である。日本側の発表者は、片山英治（大学総合教育研究センター共同研究員）、小林雅之（大学総合教育研究センター教授）、劉文君（大学総合教育研究センター特任研究員）、丸山文裕（国立大学財務・経営センター教授）、芝田政之（文部科学省国際課課長）、浦田広朗（名城大学大学院大学・学校づくり研究科教授）である。

ほかに、天野郁夫（東京大学名誉教授）、大崎仁（人間文化研究機構理事）、馬越徹（桜美林大学教授）、山本眞一（広島大学教授）、合田隆史（文部科学省審議官）など25名の参加者があり、報告に基づく質疑応答と活発な討論がなされた。

医学部附属病院

医学部附属病院検診部で子ども見学デーが開催される

医学部附属病院検診部では、8月26日（火）9時から、文部科学省の取り組みとして実施するプログラム「子ども見学デー」が開催された。

当日は、小学3年生から中学1年生の10名の子ども達とその保護者が参加し、山崎力検診部長からスライドを見ながら人間ドックについての講演を聴いた。その後実際に上部消化管内視鏡（模型）の操作や心エコーの説明を受け、診察では各自自分の心音を聴診した。また呼吸機能検査、眼圧、眼底検査等の各検査を体験型ウォークラリー形式で回りながら自分の結果表を完成させた。

当院の検診部は、今年の7月に開設1周年を迎えたことから、人間ドックについて、一般の方に広報する機会を得た。



真剣な表情で上部消化管内視鏡（模型）の操作を行う子ども達

子ども見学デーは、子どものいきいきした表情とともに盛会のうちに12時前に終了し、参加者からは、すばらしい企画であったとのご感想を頂いた。



子ども見学デー参加者と検診部スタッフ

平成20年度 学内広報 発行スケジュール

号数	原稿バ切	発行日	配布
1378	10月 1日(水)	10月 20日(月)	10月 24日(金)
1379	10月 29日(水)	11月 14日(金)	11月 20日(木)
1380	学生生活実態調査号		
1381	11月 26日(水)	12月 12日(金)	12月 18日(木)
1382	1月 7日(水)	1月 26日(月)	1月 30日(金)
1383	1月 29日(木)	2月 16日(月)	2月 20日(金)
1384	2月 25日(水)	3月 13日(金)	3月 19日(木)

学内広報にご寄稿の際は、

以下のURLにある「記事提出要領」をご参照ください。

http://www.u-tokyo.ac.jp/gen03/kouhou_j.html

【東京大学ホームページ】→【右下の学内広報アイコンをクリック】

問い合わせ先・原稿提出先

本部広報グループ 広報企画チーム
TEL: 03-3811-3393 内線22031
E-mail: kouhou@ml.adm.u-tokyo.ac.jp

ニュースページ、 インフォメーションページ への記事提出要領

「学内広報」は皆さんから送っていただく記事で作られています。下記の提出要領により、積極的に学内の情報をお寄せください。

1. 提出方法

記事は、各部署の広報担当者を通して、メールの添付ファイルとしてデータで送付すること。

2. 締切日

本学HPの右下にある「学内広報アイコン」をクリックして発行スケジュールをご確認ください。

3. 提出の際の留意事項

(1) 文字数

文字数は記事1件につき800字を目安とし、内容により増減は可とする。

(2) 写真

- ① 写真を掲載する場合はキャプション（説明文）を25文字以内で添えること。
- ② 写真を電子データで提出する場合、Wordファイルなどに貼り付けず、jpeg等の形式による元の画像ファイルを送付すること。
- ③ 写真は電子データがない場合、プリントのものも掲載可とする。
- ④ 引用の際には、著作権に留意すること。

(3) 書式

- ① 原稿は1行25文字の書式で作成すること（ただし、大きな図表などが含まれる場合は、この限りではない）。
- ② 原稿のはじめに担当部署名と記事タイトルを記載すること。
- ③ 記事タイトルは極力簡潔でわかりやすいものとする。

(4) 文章表現のきまり

- ① 句読点は「、」「。」を用いること（「,」「.」は用いない）。
- ② 時間は24時間表記とし、日付には括弧書きで曜日をつけること。
- ③ この他、特に表記する必要のない「平成●年」は削除する、特に支障がない限り「東京大学」は「本学」とする等、表記統一のための修正を編集段階で行う。

※編集スケジュールの都合上、原則として校正はできません。基本的にはいただいた原稿がそのまま掲載されますので、内容に間違いのないよう、十分ご注意ください。

4. 問い合わせ先・提出先

本部広報グループ 広報企画チーム
TEL: 03-3811-3393 内線22031
E-mail: kouhou@ml.adm.u-tokyo.ac.jp

INTERVIEW

数物連携宇宙研究機構 (IPMU)

機構長 村山 斉

今回インタビューに訪れたのは、2007年10月に設置されました数物連携宇宙研究機構の機構長、村山斉先生です。

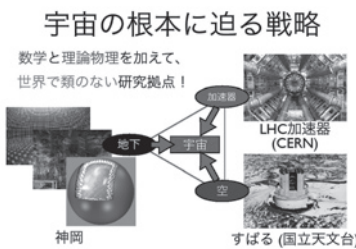
宇宙の謎に挑むべくアメリカから総長よりも高い給与で呼び寄せられ、40代前半という若さで最大の予算規模を誇る機構の長に就任しました。今後の活動が大いに注目され、また既存の枠に捉われず、東大に新しい風を吹き込んでくれるのではないかと期待されています。

Q. 機構発足の経緯、機構長を引き受けた理由は？

村山 日本の科学が世界に見えるようになることを目標として、文部科学省では平成19年度より「世界トップレベル研究拠点形成促進プログラム」を開始することとなりました。その際、東大の構想責任者がバークレイにある私のオフィスまで来訪し、「ぜひ機構長に就任していただきたい」との依頼がありました。私は一度は断ったのですが、『日本の科学を世界に発信できる機会であること』、『新しい組織にはマネジメントよりビジョンが大事』と説得され、引き受けることとなりました。

Q. 研究で明らかにしたいことは？

村山 ここでの研究は分かりやすいと思います。「宇宙はどうやって始まったのか?」、「宇宙は何で出来ているのか?」、「宇宙はこれからどうなるのか?」、「宇宙の基本法則は何か?」、「宇宙にどうして我々が存在しているのか?」という非常に素朴な疑問に答えること



です。具体的には、宇宙の「起源」や「基本法則」を数学と物理学の連携で理解することや「暗黒物質」を地下実験で捕えること、「暗黒エネルギー」を天文観測で測り、性質を調べるなどを行います。

Q. 横断的組織を創るための工夫は？

村山

(1)組織 本機構には数学者、理論物理学者、実験物理学者、天文学者など様々な分野の研究者がいます。通常は、部門を作り、縦割りの組織にしますが、本機構はそのようにはしていません。全てフラットな組織で、助教も特定の教授の下についている訳ではありません。それぞれが「一研究者」なのです。プロジェクトのために組織が作られて人員を配置するのではなく、あくまでも「人」がいて、その「人」の集まりがプロジェクトを行うという形にしています。

(2)日々 本機構では、研究発表のセミナーなどもたくさん行われ、海外からも多くの研究者が訪れます。そういった日々の活動について「特定の分野のもの」、「特定の人達だけのもの」といった壁は作っていません。可能な限り、機構の人は全員参加しようという雰囲気があります。また、毎日、3時にティータイムを設けて、全員に集まってもらっています。そういう時間に四方山話を行うことで、お互いの交流も深まり、研究上の新しい発想が出てくるのです。

(3)施設 来年度に完成予定の建物にも、分野間の交流を促進する工夫があります。5階立ての建物の3～5階が研究者の部屋になっているのですが、3～5階の中央部は吹き抜けで、上は天窓、真下は400㎡くらいの交流スペースになっています。そこにはテーブルや椅子、黒板を多く配置し、ここで人が出会い、出会っているうちに議論が始まり、黒板で計算を始める、といったような活発な議論が常に行われる場にしたいと思っています。また、それぞれの研究者

総長室総括委員会とは？

総長室の下に設置された、室、本部、機構といった組織をまとめる、本部における教授会のような役割を担っています。

総長室総括委員会HP: <http://cirp.u-tokyo.ac.jp>

の部屋も中央の吹き抜けを取り囲むように、螺旋状に配置していて、各部屋のドアも半分透けています。自分の部屋にたどり着くまでの間に必ず他の研究者の部屋の前を通ることで、常に他の研究者の存在を気にしつつ、研究が出来るのです。廊下に沿って、部屋が並び、ドアが閉まっていて、誰がどこにいるのか分からないようなオフィスではなく、本機構では、出来る限り、自分の世界に閉じこもらないような環境にしたいと考えています。



Q. 苦労している点は？

村山

(1)雇用の仕組み アメリカでは、ジョイントアポイントメントという所属先から半分ずつ給与を出すことが出来る仕組みがあります。給与に合わせ、教育研究や雑用までも、全ての時間が半分ずつで済みます。その仕組みが導入出来れば、それぞれの部局との関わりは持ちつつ、残りの半分の時間は機構に費やすことが出来るので、新しい組織を作る時には効果的です。

(2)期限付きの予算 素晴らしい研究者が来てくれてはいますが、期限付きの採用なので、これからも良い研究者を採用し続けることは難しいです。このままだと、6～7年後には優れた研究者こそ、別の研究機関を見つけて、逃げていく可能性があります。世界トップレベルの拠点が出来た頃にはなくなるのです。解決策として、寄附金を集め、基金の運用を考えていますが、国立大学法人の基金運用のルールがネックになっています。

(3)外国人の受け入れ 外国人の受け入れに関して、給与額や住居の確保、子供の教育など多くの問題があります。また、英語表記の重要書類が無いなど、海外の研究者にとって日本の情報を得ることはとても難しく、不安要素でもあるのです。その不安を払拭すべく、国全体で海外への情報発信を積極的に行う必要があります。またアメリカの大学では、配偶者の仕事を探す支援や家のローンを支援するといったことも行っています。このように、外国人にとって、赴任しやすい環境を作ることが重要であるとともに「探ってやるから来い」ではなく「来てください」という対応に変えていくことも大切だと考えています。

Q. 今後の展望・抱負は？

村山 今後、一番大切なことは、引き続き優れた研究者を招聘することです。組織を工夫することも大切ですが、良い人が集まれば良い仕事ができ、何かしらの大きな結果が出ます。研究の成果に関しては、例えば暗黒物質を捕えることにしても、成功すればノーベル賞級の凄さです。物理学と数学との連携においても今までは扱えなかった宇宙初期や宇宙の終わりなどの問題を理論的に扱えるようになれば、それも物凄い進歩になるでしょう。暗黒物質に関しては、今後10年くらいで進歩があると思います。今後数年間の研究活動で、いくつかの暗黒物質が見つかるのではないかと期待しています。

(インタビューア: 鈴木・矢島)

● イベント情報 ●

オープンキャンパス[10月25日(土)] / 公開講座[2009年1月24日(土)]

● 関連ホームページ ●

数物連携宇宙研究機構 <http://www.ipmu.jp/>



問い合わせ先：本部研究機構等支援グループ (内線20482)

東京大学知的資産経営総括寄付講座 開設記念シンポジウム開催



写真上:冒頭挨拶の小宮山 宏総長(左)、寄付講座代表の渡部俊也教授(右)、写真下:「知的資産とベンチャー」のパネル討論の様子。左から各務茂夫(産学連携本部事業化推進部長/教授)、ロバート・ケネラー氏(先端科学技術研究センター教授)、西川 潔氏(ngi group(株)取締役ファウンダー)、漆原 茂氏(ウルシテムズ(株)代表取締役社長)、原 豊氏(アドバンス・ソフトウェア・マテリアルズ(株)代表取締役社長)。

7月14日(月)13時から鉄門記念講堂において、総長室総括プロジェクト機構「知的資産経営総括寄付講座」開設記念シンポジウムが開催されました。本講座は、(株)リクルート、ngi group(株)、笠原健治氏(株)ミクシィ 代表取締役社長)、その他の皆様からのご寄付によって運営されています。

シンポジウムでは、冒頭、小宮山宏総長から開会挨拶があり、寄付講座代表の渡部俊也教授(先端科学技術研究センター)の講座概要説明に引き続き、学内教員および企業代表者による講演やパネル討論が行われました。

シンポジウムは「知的資産とビジネス・イノベーション」「知的資産と人材」「知的資産とベンチャー」のサブテーマから3部で構成され、講座開設の問題提起がなされるとともに、「新分野としての知的資産経営研究」として本寄付講座の今後の基本的な方向付けが示されました。

参加者は、一般の聴講者を中心に、本学関係教職員および学生等、併せて約200名となり、盛況のうちにシンポジウムは終了しました。

シンポジウム終了後、18時から鉄門記念講堂下のカポ・ペリカーノで懇親会もとり行われました。

産学連携の提案をしませんか

研究者の皆様へ

「UCR-プロポーザル」をご活用ください!

平成20年度から産学連携本部で運用している「産学連携(UCR)-プロポーザル」は、東京大学教員から学外へ向けての研究情報、テーマ情報の発信ページです。

〈UCR-プロポーザルの特長〉

- ☆東京大学トップページ→産学連携本部サイトから直結。日本全国の大企業、中堅企業、地方自治体等、あらゆる分野から毎日3,000件を越すアクセス。新たな連携の機会が待っています。
- ☆単なる研究室紹介ではなく、共同研究等の連携可能テーマを提案。連携への強い意欲を持った問い合わせが来ます。
- ☆単なる機器の売り込み等はブロックされ、安心です。
- ☆今秋からは国際化に対応して英語版ページを新設予定。

①先生はもう掲載済みですか？

⇒まずは、「産学連携プロポーザル」を入力して検索。

<http://proposal.ducr.u-tokyo.ac.jp/>

⇒掲載ご希望の研究者には、当部からインタビューにお伺いします。下記〈お問い合わせ先〉までお気軽にご連絡ください。

②すでにご活用中の先生方へ

UCR-プロポーザルは毎日更新が可能です。現在、本文に加えて画像、動画が2枚まで掲載できます。

⇒更新のご要望、その他のご相談もお待ちしております。

〈お問い合わせ先〉産学連携研究推進部 tlf@ducr.u-tokyo.ac.jp

連絡先:産学連携本部(本部産学連携グループ) 電話:内線22857(外線03-5841-2857)ホームページ:<http://www.ducr.u-tokyo.ac.jp/>

支援先ベンチャー情報

東大発ベンチャー(株)セルクロス 「LAN Sheet™」デモ展示中!



写真:産学連携プラザ1階デモ展示の様子。Webカメラを利用したデモで二次元通信を体験できる。

篠田裕之准教授(情報理工学系研究科)の研究成果の事業化を進めている(株)セルクロス(代表:清松哲郎氏)は、二次元通信「@CELL(アットセル)」技術を用いた二次元LANシステム製品「LAN Sheet™」を(株)イトキより商品化したしました。同社は、産学連携本部の支援を受け、本郷キャンパス内のベンチャー支援施設であるアントレプレナープラザで活動しています。

産学連携プラザ1階で当該製品のデモ展示を行っていますので、ぜひ足を運んで実際に二次元通信を体験してみてください!

(お問い合わせ先)株式会社セルクロスまで

TEL: 03-5842-2105 (担当: ササキ)

DUCR

検索

DUCR
Division of University Corporate Relations
The University of Tokyo



ケータイからみた東大 ～東大ナビ通信～ No.10



新企画!

今どきケータイ事情!

QRコードってなに?

今月より始まりました「今どきケータイ事情」!
めまぐるしく変わる昨今の携帯事情、これより隔月でケータイ最新情報、教育分野における携帯電話の活用情報など幅広くお伝えします! 第1回は、「東大ナビ」でも利用しているQRコードについての解説です。

QRコードとは、従来のバーコードよりも大容量のデータをコード化できるように開発された、マトリクス(行列)型のコードで、従来のバーコードが「一次元バーコード」と呼ばれるのに対し、「二次元バーコード」とも呼ばれます。

二次元バーコードには他にもDATA MATRIXやMaxi Codeと呼ばれるものもありますが、QRコードは(株)デンソーウェーブが開発した国産の二次元コードです。他のものに比べて、面積あたりのデータ量が多く取れること、小さなスペースでも表示できること、読み取りが高速なことなど数多くの長所があります。現在QRコードは、広告や流通など様々な業界で広く使われるようになりました。

日本では2002年にソフトバンク(当時のボーダフォン)から「J-SH09」という、はじめてQRコードリーダを搭載した携帯電話が発売されました。近年はほぼ全ての携帯電話にQRコードを読み取る機能が搭載されるようになりました。また携帯電話のユーザ調査においても、若年層を中心に多くのユーザが、QRコードをよく知っている、使ったことがあると回答したとされています。

QRコードを用いることで、キーボードでの文字入力の手間を省いて、メールアドレスやURLなどを入手することができたり、QRコードリーダの機能と組み合わせることで、たった一回のクリックでメールを送信したり特定のウェブサイトを開覧することも可能です。

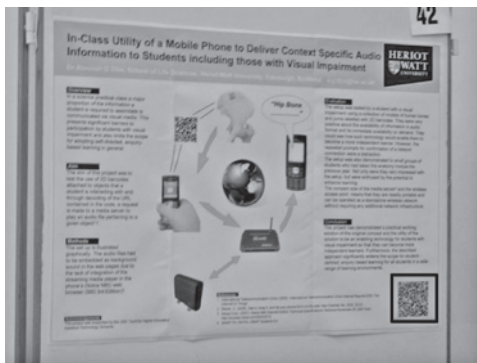
QRコードを既存の紙媒体などのメディアと組み合わせることで、携帯電話を使った情報伝達や広報(モバイル・マーケティングとも呼ばれます)をより利便性の高いものにすることが可能です。「東大ナビ」でもこの手法を参考に、学内の掲示板や各種ウェブサイトにてQRコードを掲載することで、サービスの利用や会員登録を促す取り組みを続けています。

最近では、教育分野においても、教材にQRコードを貼り付け、より深い理解を促す補助教材をネットワーク上に用意し、教材のQRコードを撮ることで補助教材にアクセスできるようにするなどの試みも始まっています。

(→右写真参照)

今後も様々な分野で、QRコードを見かける機会が増えそうです!

参考: QRcode.com
http://denso-wave.com/qrcode/



国際学会で発表されたQRコード教育利用の事例

→「東大ナビ」のQRコード



東大ナビとは?

学内外に向け携帯電話を通じて教育イベント情報をお届けするサービスです。携帯サイトに学術俯瞰講義や公開講座、学内で開催される教育イベント情報を宣伝します。

加えて、QRコードや空メール送信によりメールアドレスを登録した皆様の携帯電話に、最新の教育イベント情報を、メールマガジンで定期的にお届けします。学内教育イベントの情報収集・広報活動の媒体としてご利用頂けます。

是非、東大ナビをご活用ください!



東大ナビ
はじまる

ケータイでお得なイベント情報をGET!

詳しくは utnav.jp にアクセス。

または mail@utnav.jp に空メール!

東京大学 教育企画室



イベント情報を受けたい方

mail@utnav.jpに空メール送信!

- この記事のQRコードから
 - mail@utnav.jp宛てにメール送信
 - 携帯サイトutnav.jpにアクセスしてメルマガ登録ページへ
- ※携帯電話・PCどちらからも登録可能



返信メールから登録画面に入力!

- ご所属
- 性別・年齢など



登録完了!

- 登録確認メールが届きます
- 隔週でメルマガ・お得なクーポンGET!



イベントを宣伝したい方

携帯・PCサイトで申し込みます

- http://utnav.jpにアクセス
- イベント掲載フォームから送信!
- 追ってスタッフよりご連絡致します教育企画室TREEオフィスまで!
- 内線; 27823 (重田)
- メール; info@tree.ep.u-tokyo.ac.jp
- オフィス; 本郷キャンパス 第二本部棟401号室



組織内のインタープリター

真船 文隆

総合文化研究科 准教授

科学技術インタープリター養成プログラム担当

パブルがはじけた時、民間企業の多くは、それまでもっていた基礎研究部門を店じまいした。コストが見合わないし、経営理念にもそぐわないという理由からである。一方、その数年後、「失われた十年」の真っ只中に、未来への人類の永続的な発展を旗頭に、基礎研究部門を立ち上げた会社があった。

私はそこで6年間研究をし、そののち総合文化研究科に職を得た。企業の開発研究は、目前にあるニーズにこたえる短期的なものから、少し先の将来を見据えた中期的なものが主で、研究が成功すれば必ず収益につながる(と信じている)。一方、我々が行っていた基礎研究は明らかに開発研究とは異なり、「何十年かたったら何かに役に立つかもしれない」という超長期的なものであり、研究成果はすぐに学術論文に投稿するというスタンスで、特許化するかしないはこの次であった。会社組織の中では明らかに異質な存在だった。にもかかわらず、在籍した6年間で窮屈な思いをしたことは一度もなく、組織の中でそれなりの存在感を発揮できたと思っている。そこには、基礎研究部門と経営陣の間をうまく繋いだ管理部門の担当者(I氏)の存在があった。そのI氏とは、基礎研究部門へ移る前に、何度かお目にかかった。「この基礎研究部門は一体何を目指し、研究者に何を期待しているのでしょうか。やはり最終的に企業の収益につながる開発研究も視野に入れるべきなのでしょうか?」という私の質問に、「好きな基礎研究を自由にやってください。大体、基礎研究の研究者が無理に開発研究をしたところで、開発研究を本業とする研究者にはかなわないですから。」というなかなか刺激的なお答えであった。しかし、この言葉は我々の考えとも共鳴し、大いに救われた気になったのも事実である。I氏は元来研究者ではあったが、その研究分野はかなり製造現場に近く、お互いに専門用語で話し合ったら会話が成り立たないくらい、我々の研究分野とは離れていた。ただ、我々は、研究の目的、成果、意義をI氏に理解してもらうことが、組織の命運に関わるくらい重要だと認識していた。またI氏も足しげく研究所に通い、研究者と長時間に渡って議論をした。年度末に研究成果報告書を提出すると、しばらくして電話がかかってきた。「この部分は、このように言った方がわかりやすいし、経営陣にも響くのではないのでしょうか。」

I氏は、我々の研究内容を最もよく理解した人の一人であった。同時に、それをどのように伝えれば聞き手の心に共鳴するのか、そのコツを心得ていた。我々にとっては、最高のインタープリターだったと思う。

★科学技術インタープリター養成プログラム

URL:<http://park.itc.u-tokyo.ac.jp/STITP/>

コミュニケーションセンターだより No.51

■オープンキャンパスに出店しました

■7/31(木) 本郷キャンパスにて

今回のオープンキャンパスは、今までの中で一番の来客数ではないかという程、沢山の方にお越し頂きました。商品をご購入頂いたお客様の数が約1,000人にのぼる程でしたので、当日来て頂いた方はもっと多かったのではないのでしょうか。スタッフも大盛り上がりで、楽しい一日となりました。

今回スタッフから、「センターにある商品を使って東大生の机を再現してみたらどうか。」というアイデアが出たのでディスプレイしたところ、お客様にとっても良い反応を頂きました。その場で高校生がスタッフに勉強の仕方を質問したりと、商品を販売するだけでなくコミュニケーションセンターの本来の目的である「コミュニケーション」をとれた一日でした。



東大生の机を再現

オープンキャンパス 売上ベスト3

- 第1位 シャープペンシル
- 第2位 東大2009(書籍)
- 第3位 USBフラッシュメモリー (1GB)

■8/1(金) 駒場キャンパスにて



駒場オープンキャンパスでは元気な高校生たちが、早朝から目をキラキラさせて構内を見て回っていました。

私たちの特設テントにも熱心に足を運んで下さり、スタッフと話をしたり、コミュニケーションセンターのあり方や、研究成果商品のエピソードを真剣に聞いていました。

イベント出店は私たちスタッフにもとても良い刺激になりますので、皆さんもイベント時には遊びにいらして下さい!!

(担当: コミュニケーションセンター 山下)



The University of Tokyo

東京大学コミュニケーションセンター
The University of Tokyo
Communication Center

OPEN: 月曜～土曜 10:30～18:30

電話: 03-5841-1039

<http://www.utcc.pr.u-tokyo.ac.jp>

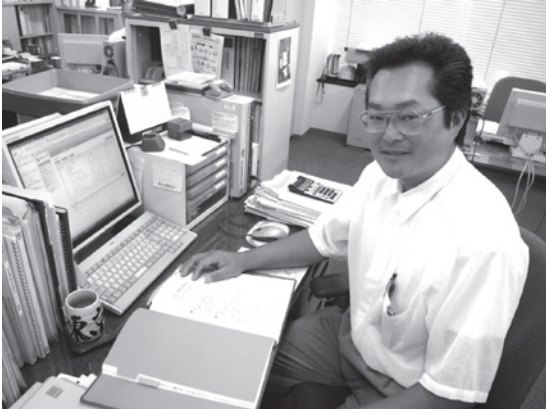
ワタシのオシゴト 第31回

Rings around the UT

本部環境グループ 環境企画チーム 係長

江川 豊さん

新しい取り組み！



デスクにて

私は関西から平成9年に東京大学へ移動し、今年の4月に3回目の帰還（移動）の挨拶を行いました。以前在籍していた時は施設部でしたが、戻ってくると「施設・資産系」となっていました。。。5ヶ月が過ぎやっとなった感じです。

系の中で環境グループに所属しているのですが、皆様もご存知のとおり4月から本郷構内自動車入構有料化が始まりました。それを所掌しているのが当グループです。本郷構内の歩行者安全安心を目指し構内交通整備を日々行っております。今年一年の社会実験期間でより良い運用が行えるように取り組みたいと思います。今後は、本郷構内自転車・バイクの入構に関する運用方法について取り組む予定となっております。

今までは施設整備をメインに仕事をしてまいりましたが、これからは幅広い職務に携わり東京大学の一人として美しいキャンパス造りに力を注ぎたいと思います。



職場の仲間と

得意ワザ：少年野球の監督

自分の性格：さっぱり！

次回執筆者のご指名：山本哲也さん

次回執筆者との関係：係長研修の飲み仲間

次回執筆者の紹介：明るく頼もしいジェントルマン



平成20年度初心者水泳講習会を終えて

今年度も本部学生支援グループ体育チームへお願いして、7月25日（金）研修室での事前説明会を実施後、御殿下記念館プールで、7月28日（月）～8月1日（金）の連続5日間に渡り初心者水泳講習会を行いました。例年通り留学生の方がほとんどですが、日本人の方も参加されました。

この講習会は、全く泳げないというより、何かの理由で水に入ったことがない方から息継ぎが出来ない方までが対象で、参加すればクロールで25mを呼吸しながら泳ぐことが出来るというのが目標です。

なお、皆さん自ら泳ぎたいという意欲のある生徒さんなので、指導員が終了時間で終わりにたくてもなかなか止めさせてもらえないこともありました。

昨年度は、日本語で説明している関係上、指導内容の理解度に差があるためか、生徒さんの中には思うように学んでもらえない場合がありましたが、今年度の参加留学生の皆さんは非常に日本語が堪能である上、明るく積極的で、指導者側も楽しく講習を進めることができました。

また、毎年度のことですが、今まで水に入ったことがなく、水に恐怖心がある方が、あるきっかけで水の楽しさが判り、若干泳げるようになった瞬間は、指導員側も非常にうれしい思いを味わいます。

しかし、事前募集準備に昨年度と違う対応等により参加者が少なかったのが反省材料ですし、私の雇用期間の関係で来年度も実施できるかどうか心配です。

今年度も東京大学水泳同好会の小林さん、高橋さんにも指導を頂き、本部学生支援グループ体育チームの方や御殿下記念館の方にも助けられ、無事に初心者水泳講習会を終えることが出来ましたことをここに御礼申し上げます。有り難う御座いました。

(東大水泳同好会 藪田正)



講習会参加者と指導員（後列）

INFORMATION

シンポジウム・講演会

シンポジウム・講演会

情報基盤センター

第2回先端的大規模計算シミュレーションプログラム利用シンポジウム開催

■開催趣旨

文部科学省先端研究施設共用イノベーション創出事業の支援を受けて、全国共同利用施設であるスーパーコンピュータを有する7大学は、社会貢献の一環として、大学で開発された応用ソフトウェアとスーパーコンピュータの民間企業への提供を平成19年7月より開始しております。本取り組みによる課題の成果報告と、現在の採択課題の中間報告を口頭発表、ポスター発表にて行います。

■開催日時など

開催日時： 10月17日（金） 13:30～18:30

開催場所： 武田先端知ビル5階武田ホール

(http://www.u-tokyo.ac.jp/campusmap/cam01_04_16_j.html)

定員： 200名〔参加登録：10月14日（火）まで〕

主催： 東京大学情報基盤センター
北海道大学情報基盤センター
東北大学サイバーサイエンスセンター
名古屋大学情報連携基盤センター
京都大学学術情報メディアセンター
大阪大学サイバーメディアセンター
九州大学情報基盤研究開発センター

後援： 文部科学省

■プログラム

発表者などの詳細はホームページでご確認ください。

プログラム概要

13:30～14:00

主催者挨拶、文部科学省挨拶

14:00～15:00 口頭発表（1）

「大規模計算結果の遠隔可視化システムに関する技術開発と実証試験」

宮地英生（株式会社ケイ・ジー・ティー）

「タービン高効率設計に向けた数値タービンの実用」

梶月浩史（三菱重工業株式会社）

「固体高分子型燃料電池材料の in silico 設計」

岡本穂治（日本電気株式会社）

15:20～16:20 口頭発表（2）

「フィラー入りゴムの大規模MDシミュレーション」

皆川康久（住友ゴム工業（株））

「大規模EMCシミュレーション」

崎山一幸（パナソニック株式会社）

「創薬バリューチェーンにおける先端的大規模計算シミュレーションプログラム利用」

志水隆一（NPO法人バイオグリッドセンター関西）

（以上、平成19年度の終了課題から6社）

16:30～17:30 ポスター発表（現在採択中を含む13社）

17:30～18:30 懇親会

■参加登録

ホームページのシンポジウム詳細

(<http://kyoyo.itc.u-tokyo.ac.jp/symp2008/>) から

10月14日（火）までにご登録ください。

当日参加も受け付けますが、予稿集をお渡しできない場合がありますので、できるだけ事前登録をお願いいたします。

■問い合わせ先

kyoyo*itc.u-tokyo.ac.jp（*は@です。）

<http://kyoyo.itc.u-tokyo.ac.jp/>

募集

募集

大学院人文社会系研究科・文学部

平成21（2009）年度大学院人文社会系研究科入学試験日程を発表

9月1日（月）から「平成21（2009）年度大学院人文社会系研究科修士課程及び博士課程学生募集要項」の配布を開始しました。日程は以下のとおりです。

【修士課程】

筆記試験（第一次試験）平成21年1月25日（日）

口述試験（第二次試験）平成21年2月10日（火）

※ 現代文芸論専門分野、文化資源学研究専攻及び韓国朝鮮文化研究専攻の口述試験（第二次試験）については、2月9日（月）に行います。

※ 文化資源学研究専攻については、社会人特別選抜での受入れ（日本人のみ）も行っていきます。

【博士課程】

第一次選考 論文審査等（専門分野によっては学力試験を実施）

第二次選考（口述）平成21年2月13日（金）

※ 現代文芸論専門分野、文化資源学研究専攻及び韓国朝鮮文化研究専攻の第二次選考（口述）については、2月12日（木）に行います。

※ 文化資源学研究専攻については、社会人特別選抜での受入れ（日本人のみ）も行っていきます。

また、出願期間は以下のとおりです。

【修士課程】

平成20年10月20日（月）～10月24日（金）

（郵送のみ受付。24日（金）17:00 必着）

【博士課程】

平成20年12月4日（木）～12月10日（水）

（直接持参又は郵送。10日（水）15:00 必着）

募集要項の郵送を希望する者は、封筒の表に「○○課程学生募集要項請求」と朱書きし、郵便番号・住所・氏名を明記して、200円分（修・博等2部必要な場合は240円分）の切手を貼付した返信用封筒（角型2号）を同封し、以下へ送付してください。

〒113-0033
東京都文京区本郷7丁目3番1号
東京大学大学院人文社会系研究科 事務部

電話 03-5841-3710,3712（大学院係）

お知らせ

お知らせ

本部入試グループ

「平成21年度大学入試センター試験受験案内」の配付始まる

「平成21年度大学入試センター試験受験案内」の配付が9月1日から全国の国公立大学等で一斉に始まった。

「受験案内」は、国公立大学又は大学入試センター試験を利用している私立大学で入手できる。

また、大学入試センターのホームページ、テレメールからも請求することができる。

なお、本学では本郷キャンパス〔正門、赤門、広報センター（龍岡門）、コミュニケーションセンター（赤門脇）、東大生協（安田講堂売店、書籍部）、農学部正門〕、駒場Iキャンパス（正門、コミュニケーションプラザ北館1階生協購売部）で配付している。

お知らせ

大学院工学系研究科・工学部

第23回 工学部・工学系研究科 技術発表会 開催のお知らせ

工学部・工学系研究科では、本年度も「技術発表会」を下記のとおり開催いたします。この発表会は技術系職員が職務上で得た技術的知見を発表し討論を行うことによって、相互技術交流を活性化させることを目的としております。是非ご参加下さるようお願い申し上げます。

日時：9月30日（火）9:30～17:00

会場：工学部2号館213号室（大講堂）

参加費：無料（懇親会2,000円）

問合せ先：技術発表会事務局

E-mail: 2008tse@tse.t.u-tokyo.ac.jp

http://www.ttc.t.u-tokyo.ac.jp/

プログラム：

開会の挨拶 9:30～9:45

発表-1 9:45～10:45

「粘塑性モデルのラチェット変形及びクリープ変形への応用」

機械工学専攻 石川明克

「振動設計演習の測定に関して」

機械工学専攻 諸山稔員

「大学開放研究室における自動試料交換検出器の完成」

原子力専攻 川手稔
『『インフラフリー』居住システムの活用による郊外別荘モデルの提案』
建築学専攻 アニリアル・セルカン

発表-2 10:55 ~ 11:55

「コリメートされたPIXE用イオンビームのプロファイル測定」
原子力国際専攻 中野忠一郎
「大気圧PIXE分析法実験装置の製作」
システム創成学専攻 細野米市
「原子線を用いた分析化学実験法の開発」
応用化学専攻 栄慎也
「電気系工学機器のノイズ電流を抑制する簡易な対策方法」
原子力国際専攻 安本勝

休憩（昼食）

特別講演 13:00 ~ 13:55

「イノベーションのための人材育成」
副学長 平尾公彦

発表-3 14:00 ~ 15:00

「非常時の避難困難者対応に関する考察」
機械工学専攻 山内政司
「CAD/CAM/CAEの学生演習について
- 20年間の取り組み -」
精密機械工学専攻 碓山みち子
「ハードディスクの廃棄方法について」
電気系工学専攻 高橋登
「演習用PCネットワークのセキュアな運用について」
システム創成学専攻 榎本昌一

ポスターセッション・展示 15:00 ~ 16:30

「ケナフ/PLA複合材料の成形とその特性向上への検討」システム創成学専攻 大澤勇
「フォトバイオリアクターの開発」
システム創成学専攻 土屋好寛
「移動機構の無い『レール錆取りポリッシャー』の試作」
システム創成学専攻 吉田二郎
「実験実習用PIXE分析における池底質・基礎データの蓄積」
原子力国際専攻 ○ 伊藤誠二
原子力国際専攻 土屋陽子
原子力国際専攻 森田明
「タンDEM型加速器(RAPID)における新たな検出手段導入の取組み」
原子力国際専攻 ○ 森田明
システム創成学専攻 川手秀樹
原子力国際専攻 伊藤誠二
「変電室における電源回路異常有無の活線調査」

電気系工学専攻 島田規人
電気系工学専攻 高田康宏
総合研究機構 中村美雄
原子力国際専攻 ○ 安本勝
「一般廃棄物整備への取組」
安全衛生管理室 ○ 大久保徹
安全衛生管理室 飯尾智
柏地区事務部 山田勉
給与・施設グループ
施設管理チーム
「非常時の避難困難者対応に関する考察」
機械工学専攻 山内政司

表彰式・閉会挨拶 16:35 ~ 17:00

お知らせ

情報基盤センター

“情報探索ガイダンス”各種コース実施のお知らせ

情報基盤センター図書館電子化部門では、レポート・論文作成や学習・研究に役立つ“情報探索ガイダンス”各種コースを実施しています。

本学にご所属であれば、学生・教職員を問わず、どなたでも参加できます。ぜひご参加ください。

●会場：

本郷キャンパス 総合図書館1階 講習会コーナー
(定員12名 予約不要です。直接ご来場ください。)

●日程・コース概要：

■10/9(木) 11:00 ~ 12:00 日本の論文を探すには？

日本の論文を探すときの代表的なデータベースであるCiNii(サイニイ)の使い方を中心に、日本の論文・雑誌記事を検索できるデータベースを紹介します。

■10/15(水) 11:00 ~ 12:00 電子ジャーナルを利用するには？

代表的な出版社の電子ジャーナルサイトを例にとって実際の利用方法を解説します。“UT Article Link”を使って、データベース検索結果から電子ジャーナルへアクセスする方法も紹介します。

■10/21(火) 15:00 ~ 16:00 自宅から検索するには？

学内・学外を問わず利用できる無料公開のデータベース・電子ジャーナルを紹介します。また、通常は学内限定のデータベース・電子ジャーナルでもECCSアカウントや個別手続きにより学外からも利用できるものがあ

りますので、その紹介をします。

■ 10/22 (水) 13:30 ~ 14:30 Web of Science コース

Web of Science は全分野の主要な学術雑誌に掲載された論文のデータベースです。通常のキーワード検索に加え、引用文献をキーにした検索も可能です。

なお、ガイダンス終了後に 30 分程度、ご希望の方に、文献管理ツール EndNote Web の使い方を説明します。

■ 10/30 (木) 15:00 ~ 16:00 文献検索早わかりコース

図書や電子ジャーナル、雑誌論文、新聞記事など、各種の文献検索方法をまとめてコンパクトに解説します。

●参加費：無料

●問い合わせ：

学術情報リテラシー係

03-5841-2649 (内線：22649)

literacy@lib.u-tokyo.ac.jp

<http://www.dl.itc.u-tokyo.ac.jp/gacos/training.html>

お知らせ

大学院工学系研究科・工学部

IAESTE 国際インターンシップ説明会 開催のお知らせ

IAESTE 東京支部では、下記により国際インターンシップの説明会を開催いたします。

IAESTE (イアエステ) は、理工農薬学系学生に海外の企業や大学等での国際インターンシップを仲介している国際非政治団体です。1948 年にヨーロッパで発足し、現在 80 カ国余りの国々が IAESTE に加盟しています。ユネスコ等を諮問団体として、全世界 4,000 社に及ぶ企業・大学の後援を軸に、これまでに延べ 30 万人近い学生へ国際インターンシップの場を提供してきました。IAESTE 研修は、専門分野における広い視野や国際感覚を始め、他では得ることのできない貴重な経験を与えてくれるはずです。IAESTE 理事校の一つである東京大学では、毎年多くの学生が IAESTE 国際インターンシップに参加し、活発な国際交流が行われています。

現在、IAESTE は 2009 年度 IAESTE 国際インターンシップ参加者を募集しています。留学生・研究生も参加可能です。国際インターンシップに興味がある理系学生の方は、是非お気軽に足をお運びください。



ドイツ IAESTE インターンシップ参加者 (一昨年度)

<説明会概要>

日時：10月11日(土) 14:00 ~ 16:00

場所：本郷キャンパス工学部1号館1階14教室

内容：

① IAESTE 説明	14:00 ~ 14:15
②派遣生 OB・OG による研修報告	14:15 ~ 15:00
③来日中の研修生による現状報告	15:15 ~ 15:30
④個別相談会	15:30 ~ 16:00

また、説明会に参加できない方のために別途、学内説明会を実施いたします。

日時：10月8日(水)、9日(木) 12:20 ~ 14:00

場所：本郷キャンパス 工学部2号館 SUBWAY 前広場(予定)

※詳細は後日、丁友会 Web サイトに掲載致します。

お知らせ

生産技術研究所、大学院総合文化研究科・教養学部

第4回東京大学駒場キャンパス技術発表会 開催のお知らせ

生産技術研究所ならびに大学院総合文化研究科・教養学部共催の技術発表会を、下記の通り開催いたします。今回は特別講演に脳の研究者である藤井正子先生をお招きして、交通事故・労働災害等による外傷性脳損傷の回復訓練として最近の研究と実例をまじえた講演をお願いしておりますので、ふるってご来聴ください。

また、発表会終了後に懇親会を開催いたしますので併せてご参加ください。

日時：10月17日(金) 10:00 ~ 17:00

場所：駒場リサーチキャンパス

総合研究実験棟・大会議室 (An301・302)

【口頭発表】

「四重極電子偏向器の試作品を用いた核共鳴励起内部
転換電子放射の測定」

河内 泰三 技術専門職員

生産技術研究所・第1部

「ポータブル簡易型可視化風洞の試作」

高間 信行

技術専門員 生産技術研究所・第2部

「流れの可視化実験例」

高橋 岳生 技術専門員

生産技術研究所・第5部

「振動流型熱輸送デバイスを内蔵した金属製およびガ
ラス製熱拡散板の試作（加工技術の紹介）」

上村 光宏 技術専門職員

生産技術研究所・第2部

「銅像と写真に刻まれた駒場の記憶 アルチュール・
アリヴェと第一高等学校」

小泉 順也 事務補佐員

大学院総合文化研究科・駒場博物館

「平成19年度核融合科学研究所技術発表会への参加報
告」

築場 豊 技術専門職員

生産技術研究所・第4部

「技術研究会運営協議会 出席報告」

「放電加工技術ネットワーク2007勉強会について」

谷田貝 悦男 技術専門職員

生産技術研究所・試作工場

【招待講演】

「暴露実験(建設材料)における技術職員の役割と成果」

星野 富夫 技術専門員

生産技術研究所・第5部

【特別講演】

「神経リハビリテーションのパラダイムシフトと外傷
性脳損傷の回復訓練」

藤井 正子 医学博士

NPO法人TBIリハビリテーション研究所所長

【懇親会】

発表会では収まらなかった討論などを懇親会で発表者
と引き続き論議してください。

今回は催し物として元3部教員・藤井陽一先生のフ
ルート演奏を企画しております。

ご来聴いただければ幸いです。皆様のご参加をお待ち
しております。

日 時 : 10月17日(金) 17:30～20:00

会 場 : 駒場リサーチキャンパス
研究棟Ce棟2階 笠岡ラウンジ

会 費 : 1,500円

【問い合わせ先】

第4回東京大学駒場キャンパス技術発表会実行委員長

大塚 日出夫(内線56842)

e-mail hideo@iis.u-tokyo.ac.jp

お知らせ

大学院理学系研究科・理学部

第14回理学部公開講演会 「過去を知る理学」

理学部で行われている研究は現在起こっている現象を
調べるものばかりではありません。現在の状況は過去の
歴史の結果であることを考えれば、過去にどんなことが
起こったかを知ることとも理学の対象となるのです。この
ような研究の中から今回は、宇宙と地球と生命の歴史に
迫る話題を気鋭の研究者がわかりやすくご紹介します。

日時: 11月1日(土) 14:00～16:30(13:00開場)

会場: 本郷キャンパス 安田講堂

入場: 無料 事前申し込み不要

どなたでもご参加いただけます。

定員: 700名(当日先着順)

*終了後、講演者との歓談の時間を設けます。

講演内容:

「長老の星が語る宇宙錬金術」

茂山 俊和

(理学系研究科 附属ビックバン宇宙国際研究センター
准教授)

「全地球凍結～地球史と生命進化の謎～」

田近 英一(理学系研究科 地球惑星科学専攻 准教授)

「メスとオスの起源を探る ---- オス特異的遺伝子
“OTOKOGI”の発見 ----」

野崎久義(理学系研究科 生物科学専攻 准教授)

中継: インターネット配信を予定

主催・問い合わせ先:

大学院理学系研究科・理学部

TEL: 03-5841-7585

E-mail: kouhou@adm.s.u-tokyo.ac.jp

URL: <http://www.s.u-tokyo.ac.jp/PL14>

お知らせ

大学院教育学研究科・教育学部

公開講座「^{しょうがい}関係障碍という視点からみた発達障碍」のご案内

教育学研究科附属心理教育相談室（室長 下山晴彦教授）では、心理臨床の現場で向き合っている様々なケースのなかで、特に当相談室で多く受けている問題を広くご理解いただきたいと考え、公開講座を開催いたします。開催3回目となる今回は、社会の中でよく耳にする「発達障碍」を取り上げます。発達障碍という名称のものに、様々なものが一括してくられるようになってきている今日、改めて「発達障碍とは何か」について自閉症を中心に、その理解と対応について小林隆児先生にお話し頂きます。併せて、関係性を大切にしている温かな地域支援のネットワークのなかで、地域の親や子どもの心の支援をしている臨床心理士の栗原はるみ先生からも、現場の声を聞かせていただきます。

教育現場、発達・療育に携わる専門家の方々だけでなく、学生やこの問題に関心のある方々にぜひおいいただき、共にこの問題に対する理解を深める機会にできたらと考えております。

日時：11月16日（日） 14:00～17:00

場所：本郷キャンパス 赤門総合研究棟 200A 番教室

プログラム（敬称略）：

司会：田中千穂子（教育学研究科教授）

○ 14:00～ 開会の辞

下山晴彦（教育学研究科教授 / 心理教育相談室室長）

○ 14:05～ 講演 1

「関係としてみた発達障碍の理解と対応－自閉症を中心に－」

小林隆児（精神科医、大正大学教授、狛江のんびりクリニック）

○ 15:40～ 講演を受けて

・「地域のネットワークのなかで」

栗原はるみ（臨床心理士、狛江市教育研究所）

・「講演をうけてのシェアリング」

・質疑応答

定員：100名（要事前予約）

入場料：無料

申込期間：9月9日（火）～11月12日（水）正午

申込方法：

●メール：koukai@p.u-tokyo.ac.jp

●FAX：03-3818-0459（申込専用・24時間受付）

記載事項：氏名・ふりがな・電話番号・所属・メールアドレスもしくはFAX番号

問い合わせ：

TEL：03-3818-0439（平日10:00～17:00）

事務連絡

人事異動（教員）

発令日、部局、職、氏名（五十音）順

	氏名	異動内容	旧（現）職等
（退職）			
20.8.31	青木 茂樹	辞職	大学院医学系研究科准教授
20.8.31	青木 則明	辞職	大学院医学系研究科准教授
（採用）			
20.8.16	坂田 一郎	政策ビジョン研究センター教授（出向）	経済産業省大臣官房総務課政策企画官
20.9.1	尾崎 雅彦	大学院新領域創成科学研究科教授	海洋研究開発機構地球深部探査センター技術開発室開発グループ グループリーダー
20.9.1	BLACKWOOD THOMAS STEPHEN	社会科学研究所附属日本社会研究情報センター准教授	
20.9.1	小林 洋平	物性研究所准教授	産業技術総合研究所主任研究員
（昇任）			
20.8.16	中島 勸	政策ビジョン研究センター准教授	医学部附属病院助教
20.8.16	石神 健	大学院農学生命科学研究科准教授	大学院農学生命科学研究科講師
20.9.1	大久保靖司	環境安全本部教授	環境安全本部准教授
20.9.1	梅景 正	環境安全本部准教授	環境安全本部講師
20.9.1	佐々木 司	学生相談ネットワーク本部教授	学生相談ネットワーク本部准教授
20.9.1	赤羽 正章	医学部准教授	医学部講師
20.9.1	鈴木宏二郎	大学院新領域創成科学研究科教授	大学院新領域創成科学研究科准教授
20.9.1	寒野 善博	大学院情報理工学系研究科准教授	大学院情報理工学系研究科講師
20.9.1	増田 直紀	大学院情報理工学系研究科准教授	大学院情報理工学系研究科講師

* 退職後又は採用前の職等については、国の機関及び従前国の機関であった法人等のみ掲載した。

東京大学における教員の任期に関する規則に基づく専攻、講座、研究部門等の発令については、記載を省略した。

Contents

特集

- 02 「東大の教育の国際化に意見しよう！」プロジェクト
東京大学の国際化に関する意見と要望調査(学生向け)

NEWS

一般ニュース

- 08 本部学生支援グループ
Utoi(東京大学アウトリーチイニシアティブ)
第2回研究会開催される
- 08 本部留学生支援グループ
株式会社アサツー ディ・ケイ会長と東京大学アサ
ツー ディ・ケイ中国育英基金奨学生、本学関係者
の懇談会
- 09 本部環境安全グループ
「本部棟等避難訓練」、実施される

部局ニュース

- 10 大学院薬学系研究科・薬学部
外国人留学生・外国人研究員との交流会が開催される
- 11 医学部附属病院
「2009 看護フォーラム」で看護師募集活動を実施
- 11 生産技術研究所
革新的シミュレーション研究センター設立記念シン
ポジウムを開催
- 12 地震研究所
第17回一般公開・公開講義「大地に刻まれた歴史」
を開催
- 13 医科学研究所
医科学研究所公開セミナー「ラブラボ」を開催
- 14 大学総合教育研究センター
日中高等教育財政ワークショップ「新しい時代の高
等教育財政一日共同の課題」の報告
- 14 医学部附属病院
医学部附属病院検診部で子ども見学デーが開催され
る

コラム

- 16 発掘!総長室総括委員会(第8回)
- 17 Crossroad 産学連携本部だより vol.34
- 18 ケータイからみた東大 ~東大ナビ通信 No.10~
- 19 インタープリターズ・バイブル vol.16
- 19 コミュニケーションセンターだより No.51
- 20 Relay Column「ワタシのおシゴト」第31回
- 20 噴水 平成20年度初心者水泳講習会を終えて

◆ 表紙写真 ◆

「国際化に関する意見と要望調査」
インターネットアンケートの
ポスター

INFORMATION

シンポジウム・講演会

- 21 情報基盤センター
第2回先端的大規模計算シミュレーションプログラム
利用シンポジウム開催

募集

- 21 大学院人文社会系研究科・文学部
平成21(2009)年度大学院人文社会系研究科入学
試験日程を発表

お知らせ

- 22 本部入試グループ
「平成21年度大学入試センター試験受験案内」の
配付始まる
- 22 大学院工学系研究科・工学部
第23回工学部・工学系研究科技術発表会開催の
お知らせ
- 23 情報基盤センター
“情報探索ガイダンス”各種コース実施のお知らせ
- 24 大学院工学系研究科・工学部
IAESTE 国際インターンシップ説明会 開催のお知
らせ
- 24 生産技術研究所、大学院総合文化研究科・教養学部
第4回東京大学駒場キャンパス技術発表会 開催の
お知らせ
- 25 大学院理学系研究科・理学部
第14回理学部公開講演会「過去を知る理学」
- 26 大学院教育学研究科・教育学部
公開講座「関係障病という視点からみた発達障病」
のご案内

事務連絡

- 26 人事異動(教員)

淡青評論

- 28 博士学生 一研究テーマ、習得できる知識・技量、
そして修了後の給料一

編集後記

10月1日より異動が決まり、学内広報の担当としては、今月号が最後となりました。いつもご愛読頂いている皆様、原稿を寄せて下さった皆様、ありがとうございます。多くの原稿に触れ、色々な意味で東大の広さ・深さを感じることが出来ました。これからは、一読者として、温かく(時に厳しく)この学内広報を見守っていきたいと思います。(た)



七徳堂鬼瓦

博士学生 – 研究テーマ、習得できる知識・技 量、そして修了後の給料 –

私が他の多くの先生と最も異なるのは、大学に来る前の数年間米国の民間研究機関で、研究活動と共に、博士学生の求人活動にかなりの時間を割いていたという経験があることだと思う。以下はこの経験を踏まえた議論なので、工学系、特に電気・計算機系分野における話である。現在米国では、博士 (PhD) を取得した者の内、大学の先生となるものはあまり多くなく、民間企業へ就職するのが普通である、というよりも最初からこのつもりで研究テーマを選定している。大学の口が少ないという点ももちろんあるが、それよりも民間企業への就職が特に、経済面で魅力的であることによる。これから景気が悪くなってくると、当然変わってくるものとは思いますが、米国で PhD を取得すると年間給料として 10 万ドル程度はもらえ、修士卒の給料の 50% 増し以上になっている。なお、米国の大学もこの給料と競争する必要があるため、求人ではいろいろ工夫しているようである。一方、日本では (為替相場にもよるが)、この半分もいかないのではないか。この差は、博士学生が、どのような考え方で研究テーマを選び、何を目標に研究し、修了時に自分はどのような姿になっているべきと考えているかが、日米で大きく異なるからと考える。学生自身の考え方が異なるというのもあるが、もっと大きいのは、受け入れ側の企業が捉える博士学生像が全く違うということである。米国でも昔は PhD 取得者は自動的に超高度先端研究に携わるものという考え方があったと思うが、20 年くらい前から PhD 取得者が企業で開発よりの研究、あるいは純然たる開発の主要要員という位置付けになった。博士取得者は、企業では 1 つの開発プロジェクトリーダーに近い存在であり、すぐに部下も付き、開発を引っ張ることが期待され、また実際にそうなっている。将来が期待できる進路であるという認識が定着し、博士学生志望数は増加、競争も激しくなり、結果として研究成果と企業からみた価値の両面で向上し続けている。この米国の状況が本当に良いのかどうかは議論の余地もあるのは確かだが、博士学生の社会における価値という点で、何らかの取り組みが日本でも必要だと考える。

藤田昌宏 (大規模集積システム設計教育研究センター)

(淡青評論は、学内の教職員の方々をお願いして、個人の立場で自由に意見を述べていただく欄です。)

この「学内広報」の記事を転載・引用する場合には、事前に広報委員会の了承を得、掲載した刊行物若干部を広報委員会までお送りください。なお、記事についての問い合わせ及び意見の申し入れは、本部広報グループを通じて行ってください。

No. 1377 2008年9月22日
東京大学広報委員会

〒113-8654
東京都文京区本郷7丁目3番1号
東京大学本部広報グループ
TEL : 03-3811-3393
e-mail : kouhou@ml.adm.u-tokyo.ac.jp
<http://www.u-tokyo.ac.jp>